

神秘学ポエジー 風遊戯  
photopos  
138

【神秘学ポエジー～風遊戯 第276集】 photo ヴァージョン

photopos 3426-3450

《2024.1.25～2024.2.18》

神秘学遊戯団



あたりまえという  
落とし穴のなかで

知っていても  
知らずにいる

読んでいても  
読めずにいる

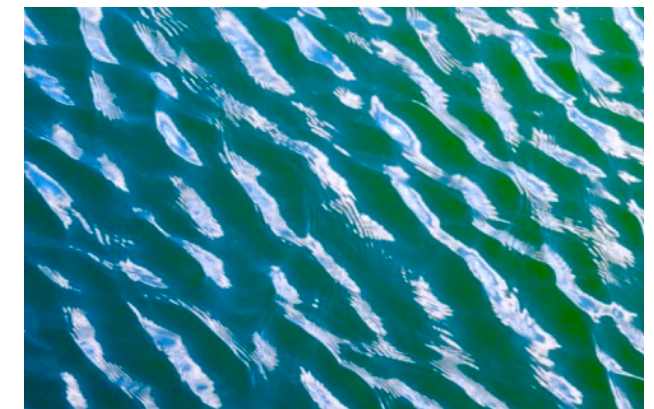
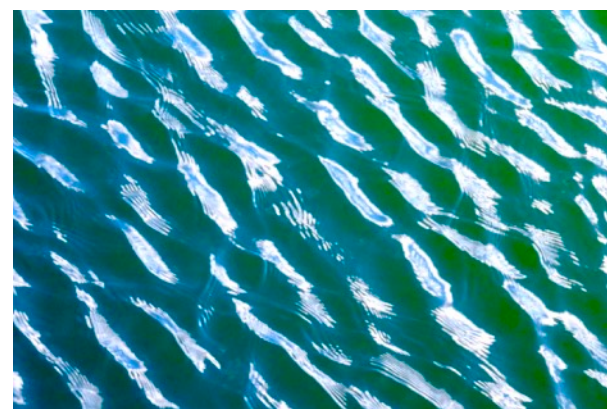
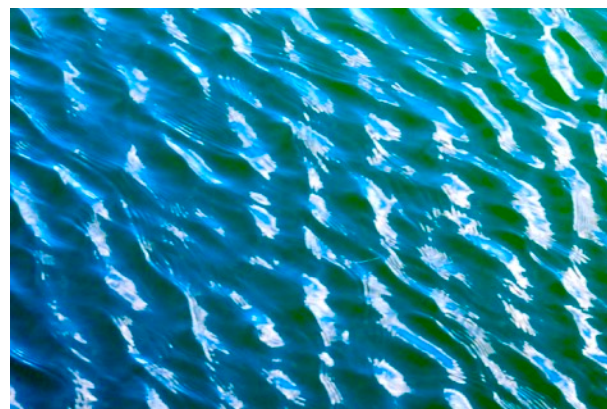
見えていても  
見えないでいる

聞こえていても  
聞けないでいる

それに気づいたとき  
あたりまえという  
ヴェールはひらかれ

ひとつひとつの  
はじめてが  
はじまっていく

そして世界の謎が  
それにもまして  
じぶんという謎が  
はるかな道への導きとなる



\*愛媛県久万高原町笛ヶ滝公園にて



白を求めながら  
黒となる  
黒を求めながら  
白となる  
その矛盾に  
如何に対峙するか

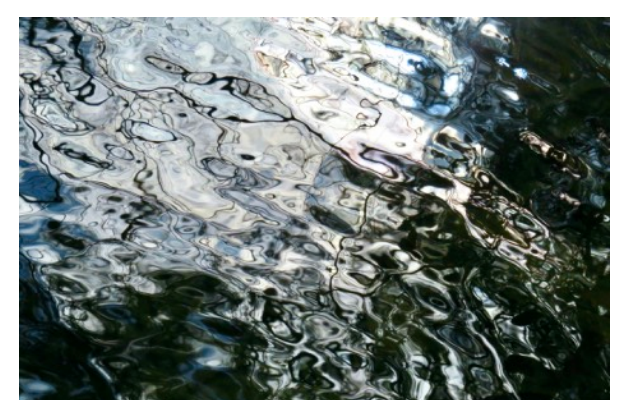
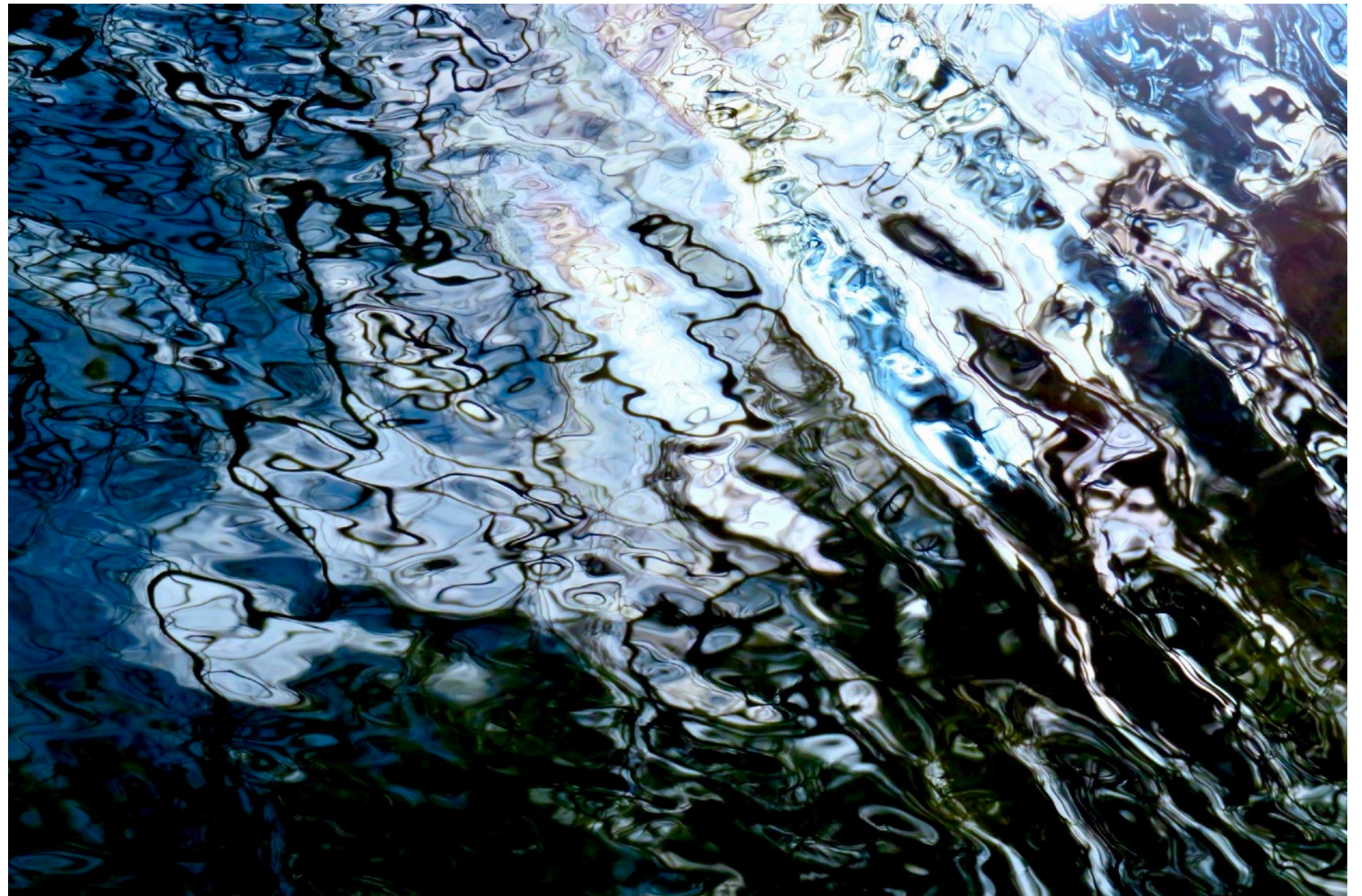
白か黒かではなく  
白でも黒でもあり  
白でも黒でもなく

生を求めながら  
死を選ぶ  
死を求めながら  
生を選ぶ  
その矛盾に  
如何に対峙するか

生か死かではなく  
生でも死でもあり  
生でも死でもなく

言葉を求めながら  
沈黙する  
沈黙を求めながら  
言葉を発する  
その矛盾に  
如何に対峙するか

言葉か沈黙かではなく  
言葉でも沈黙でもあり  
言葉でも沈黙でもなく





世界を見るとき  
その世界には  
私が織りなされている

花が咲くとき  
私が咲いているように

水が流れるとき  
私が流れているように

私が感じるとき  
その感じられることには  
私が織りなされている

ひとが悲しむとき  
私の悲しみとなるように

ひとが愛するとき  
私の愛となるように

私が知るとき  
その知られることには  
私が織りなされている

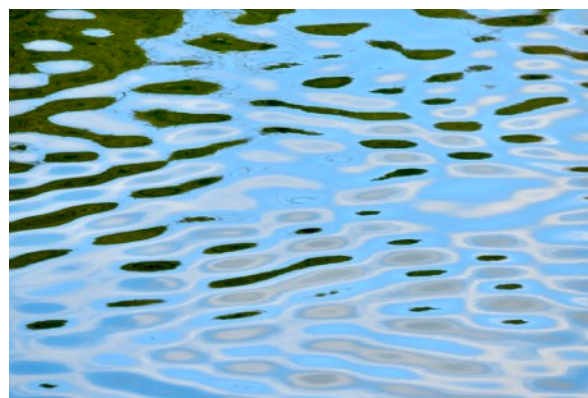
本を読むとき  
私が読まれているように

音楽を聴くとき  
私が聴かれているように

私が働きかけるとき  
働きかけられたものには  
私が織りなされている

光を灯すとき  
私が灯されているように

奏でるとき  
私が奏でられているように





何者かになると  
じぶんではなくなる

じぶんにはかたちがないのに  
何者かであるとき  
そこにはかたちがあるからだ

かたちのなかにいるじぶんは  
自由をなくしている  
知ることで  
かたちに閉じ込められた知のように

じぶんを知ろうとすることは  
じぶんを離れることだ

そしてじぶんは  
ふたりになる

知るじぶんと  
知られるじぶん

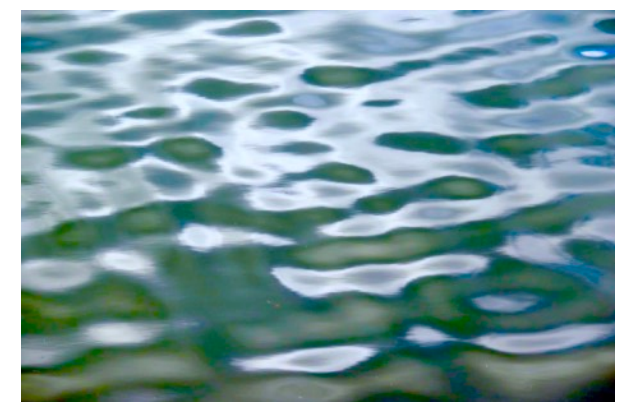
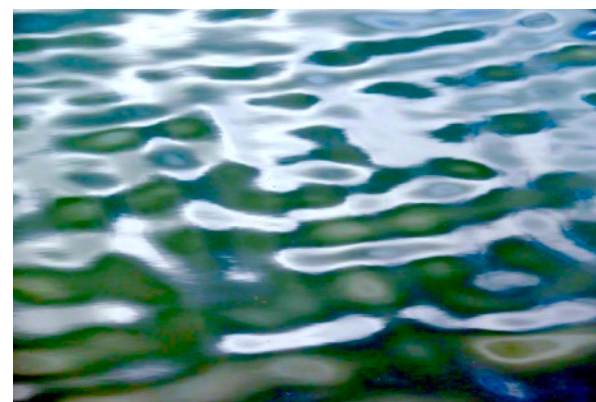
知られるじぶんには  
かたちがある

そのかたちを見て  
こんなふうに変えたい  
とか思ったりもするが

ひとりのじぶんに戻ったとき  
じぶんを変えられるかどうかわからない

じぶんには  
かたちが見えないからだ  
思い出せない夢のように

何者でもない者でありながら  
じぶんを生きられますように





役に立つから  
生きているのではない

役に立とうとして  
遊ぶのではないように

ほんとうに生きられるように  
役に立たつことからの自由へ

役に立つから  
知るのではない

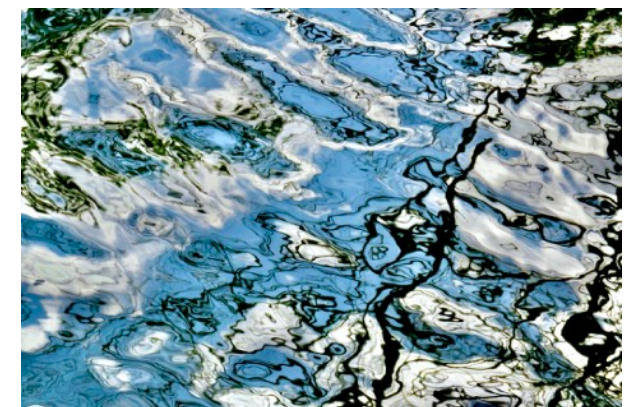
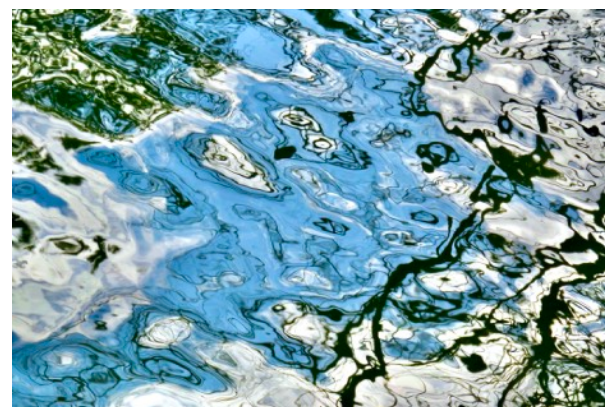
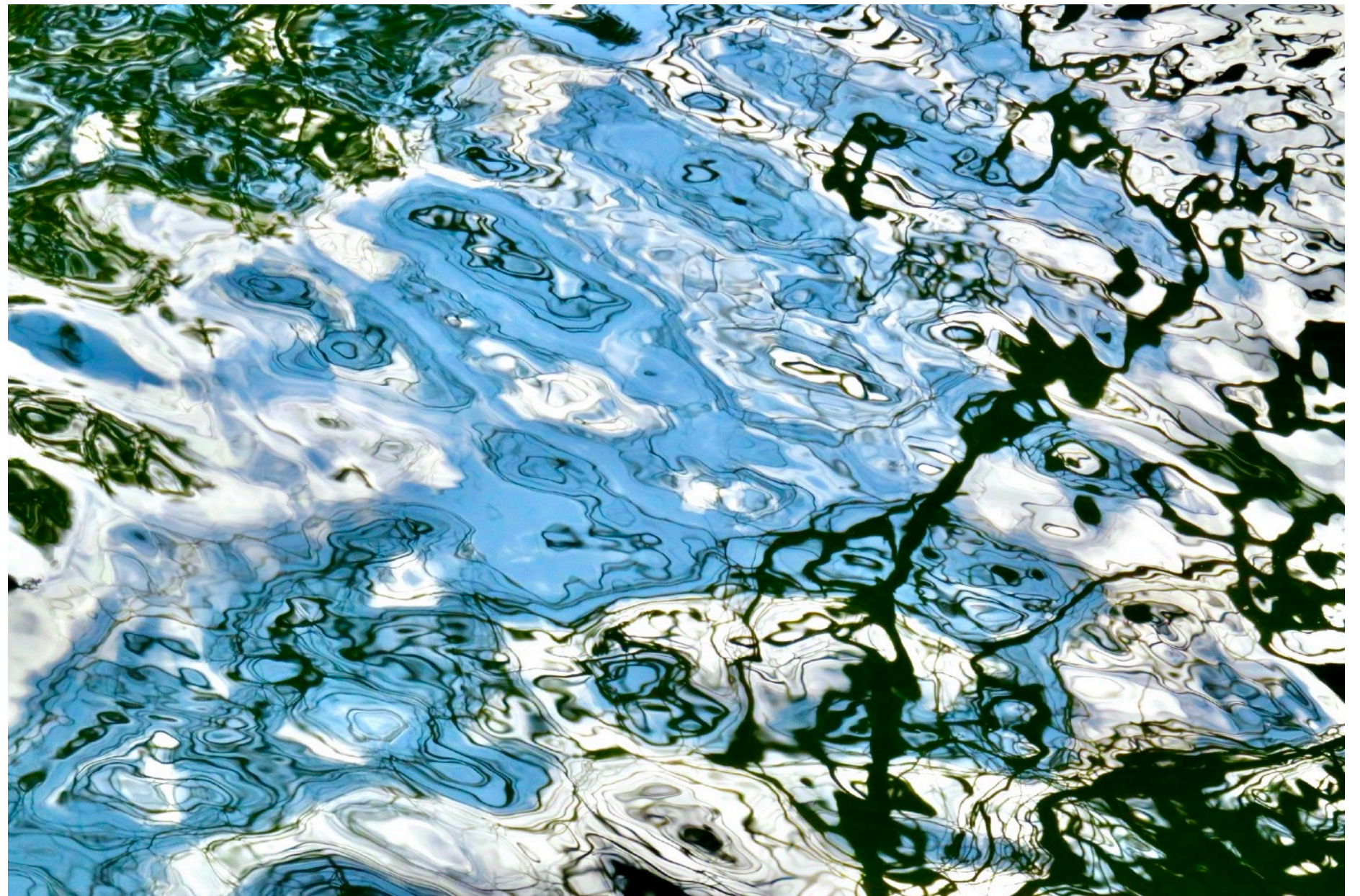
役に立とうとして  
考えるのではないように

ほんとうに知ることができるように  
役に立たつことからの自由へ

役に立つから  
愛するのではない

役に立とうとして  
歌うのではないように

ほんとうに愛することができるように  
役に立たつことからの自由へ



\*愛媛県久万高原町笛ヶ滝公園にて



☆photopos-3431 2024.1.30

わたしは  
死を知らない

死を恐れるのは  
生きているからだ

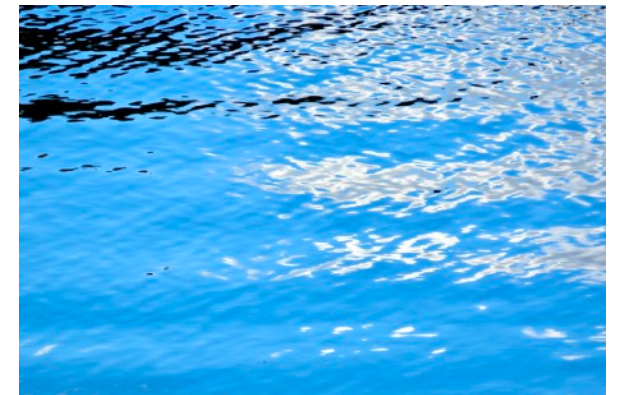
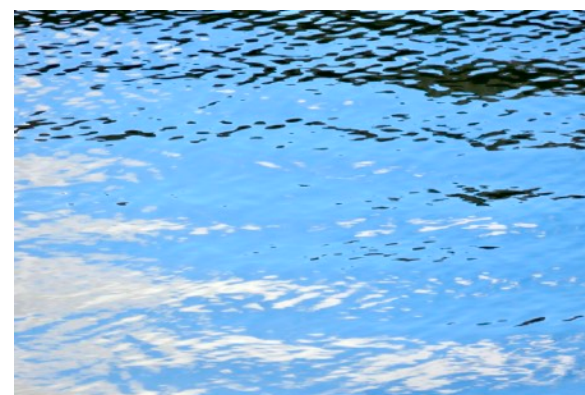
ほんとうのわたしは  
死なない

死を迎えるのは  
からだだけだからだ

けれど  
からだをもちながら  
からだをこえて得るものが必要となる  
それこそが  
死後のわたしを導いてくれる

からだがなくでは得られないものは  
棄てていかねばならない  
からだのないところでは  
求めても決して得られないからだ

生も死も超えたところで  
わたしは自由になれる



\*愛媛県久万高原町笛ヶ滝公園にて



ことばは  
辞書のなかでは  
生きてはいない

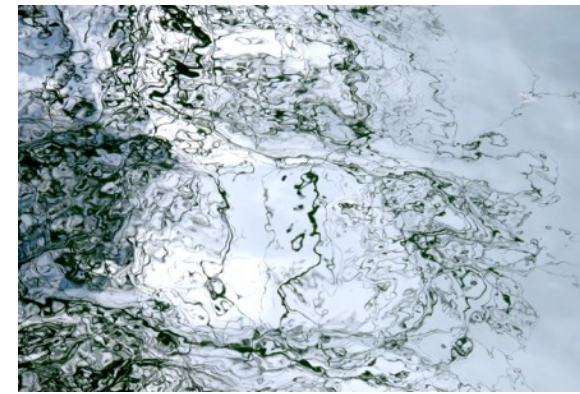
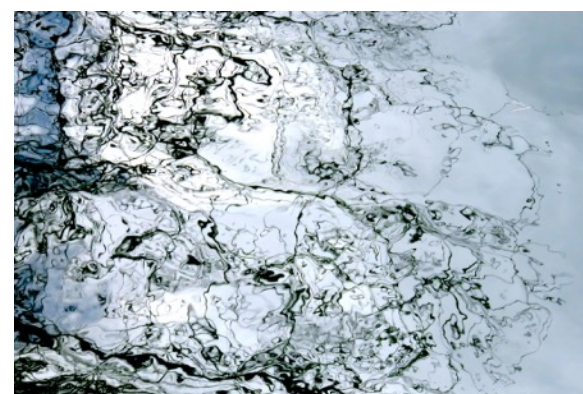
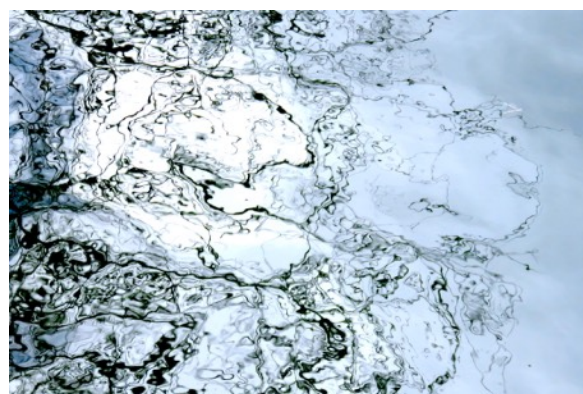
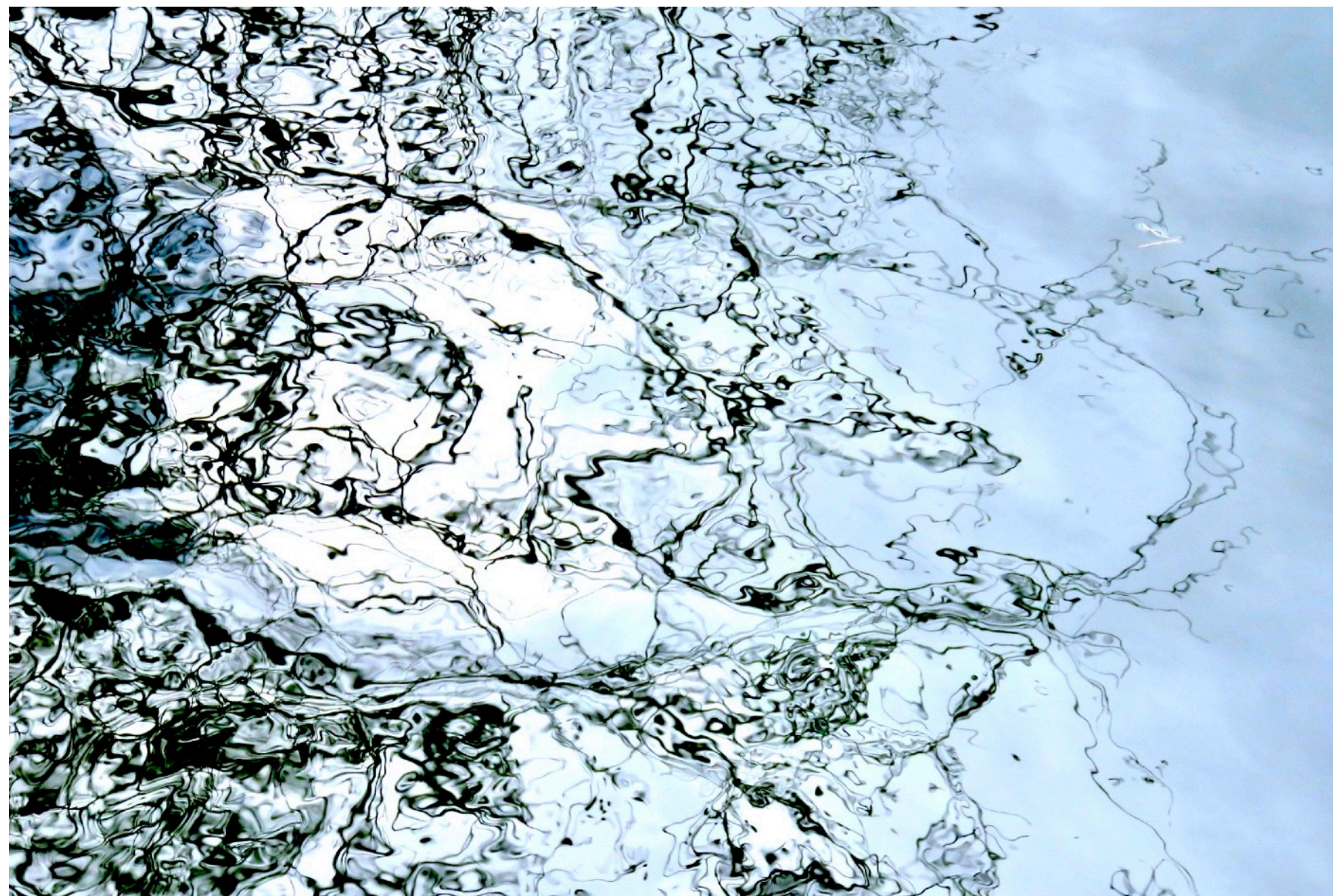
意味を  
伝えるだけの  
道具ではないから

意味に  
寄り添いながらも  
意味から  
自由になろうとする

詩人は  
ことばを解き放ち  
ときに  
意味を笑い  
意味を遊び

それでいて  
まだ見ぬ  
意味の深みに下り

そうして  
音と戯れ  
呼吸しながら  
ことばとともに詠う





からだは  
地から生まれ  
ロゴスは  
天から生まれ

からだと  
ロゴスは  
わたしのなかで  
むすびあう

からだはロゴスへ  
ロゴスはからだへ

からだは地から解かれ  
ロゴスは天から解かれ

わたしは  
光と闇の交錯するなか  
移動する樹木の神殿として  
交差配列を生きてゆく

やがて  
からだは地へ  
ロゴスは天へと帰還するが

そのとき  
地は天へ  
天は地へと  
新たな実りを捧げるだろう

それはわたしという  
矛盾を生きる  
魂のなかで咲いた  
花の果実…





みんな  
は  
つくられる

ひとは  
ひとりひとり  
ちがうのに

派  
は  
つくられる

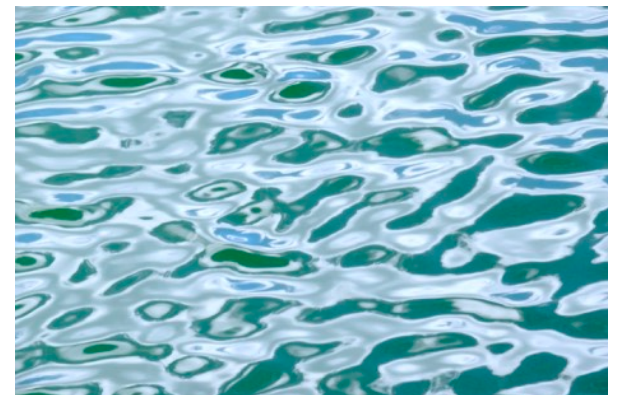
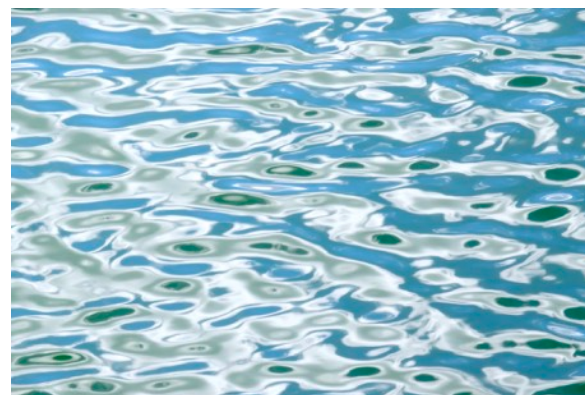
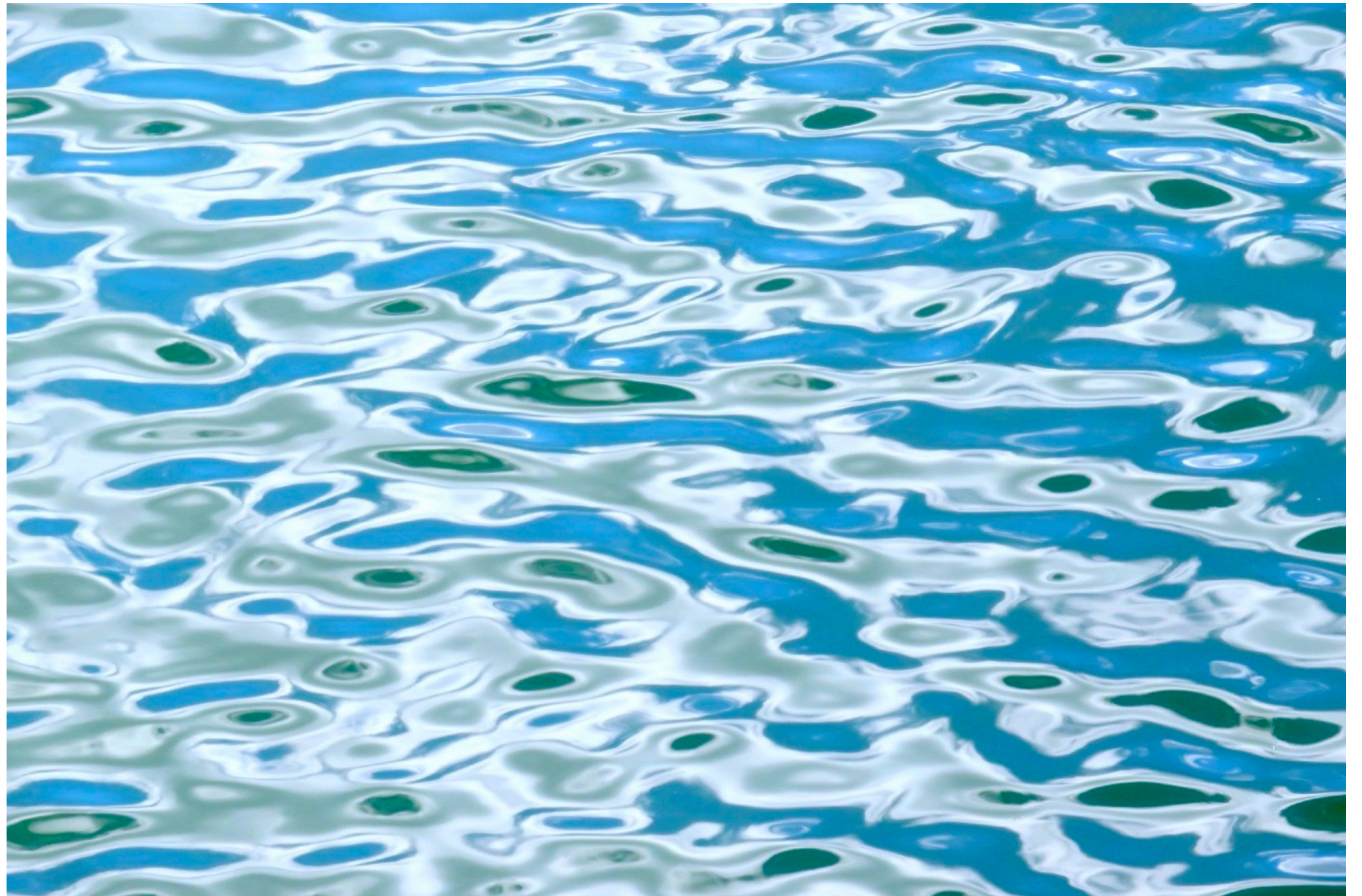
多くても  
少なくとも  
派は  
ひとりじゃない

みんながするから  
わたしもする  
そのとき  
わたしは  
みんなになる

ひとは  
こわいけど  
みんなですれば  
こわくないからだ

けれど  
みんなが  
みんな  
なにをしているか  
それを見失ったとき

わたしは  
知らないうちに  
みんなとおなじ道へと  
否が応でも  
歩かされていく



\*愛媛県久万高原町笛ヶ滝公園にて



わたしが  
この世界に  
生まれたときから

わたしは  
そこで生きられる世界を  
ひとつひとつ開いてきた

わたしの  
歩いている世界は  
わたしが歩いてきた世界である

わたしに  
見えている世界は  
わたしの見てきた世界である

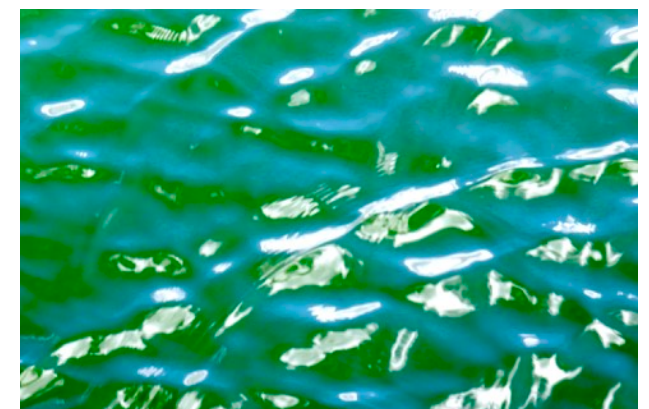
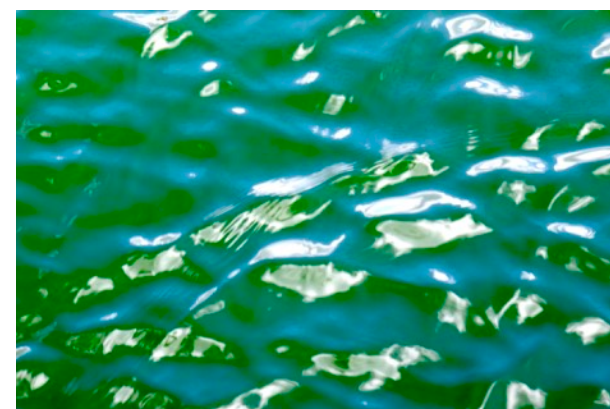
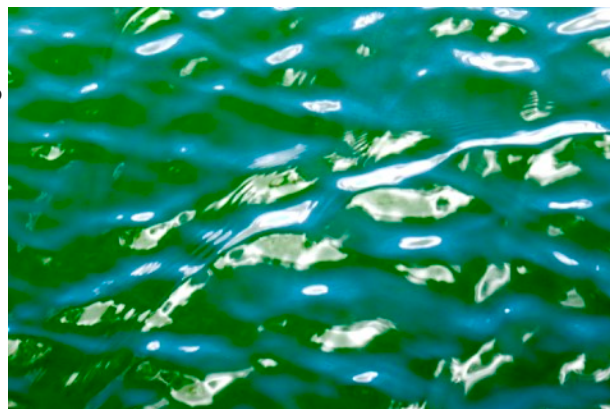
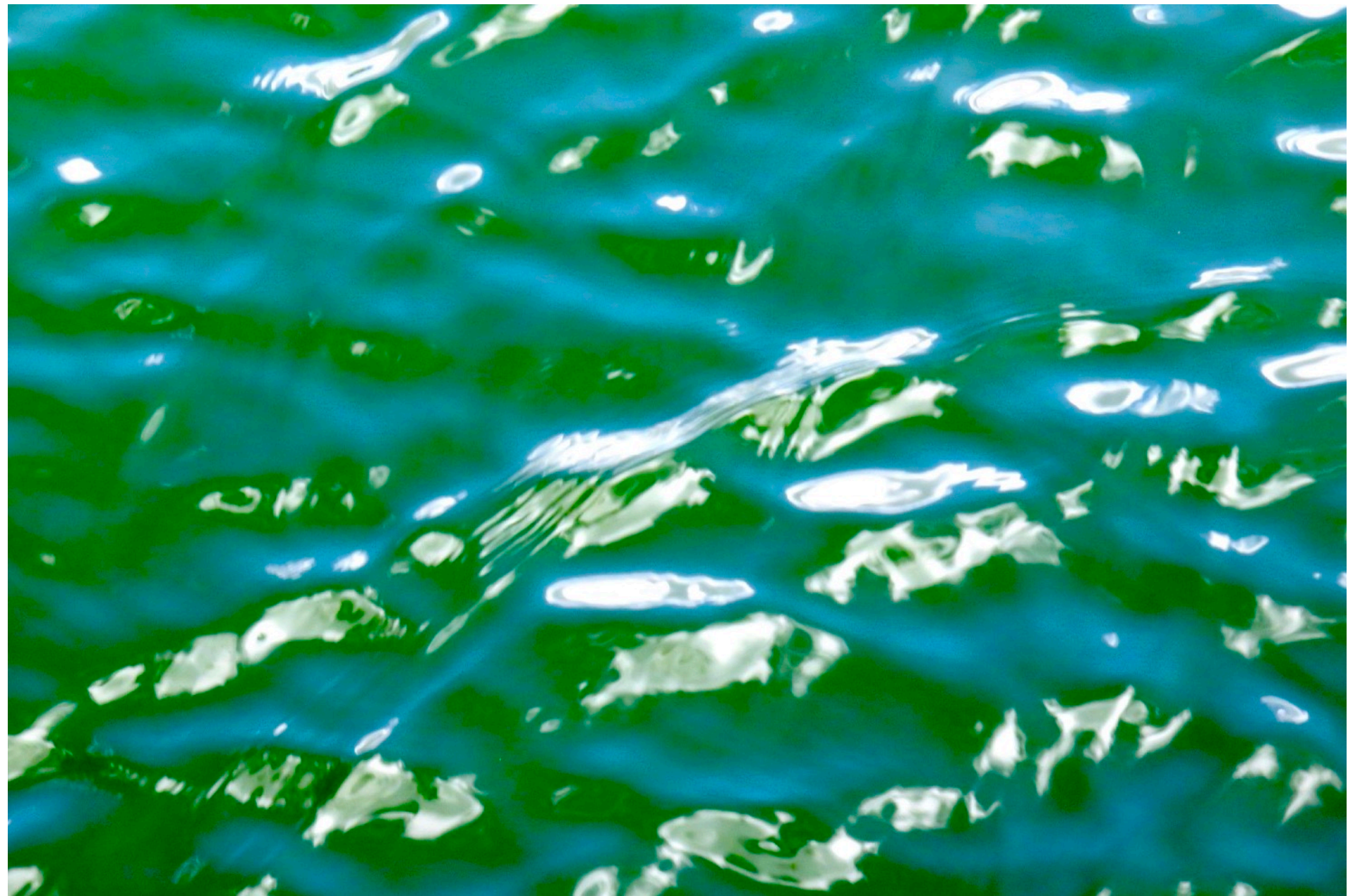
わたしの  
考えている世界は  
わたしの考えてきた世界である

わたしの  
愛している世界は  
わたしの愛してきた世界である

わたしが  
わたしの生きている世界を  
みずから閉じてしまうとしたら

わたしは  
わたしという世界を  
閉じた世界にしてしまうことになる

その世界は自縛されたまま  
だれもそこには  
入ってくることができなくなる



＊愛媛県久万高原町笛ヶ滝公園にて



変わる  
変わりつづける  
それが  
生きた現実

わたしの見る世界も  
それを見るわたしも  
変わりつづけている

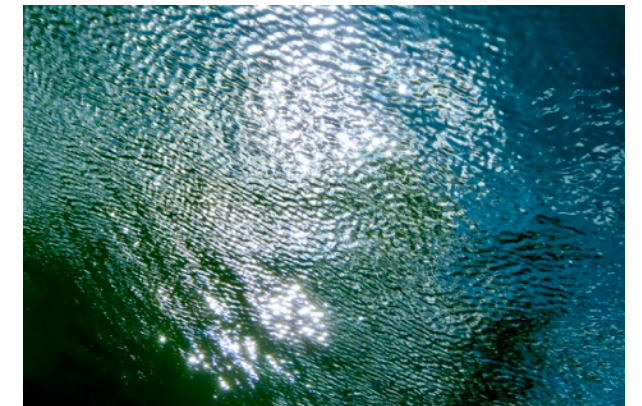
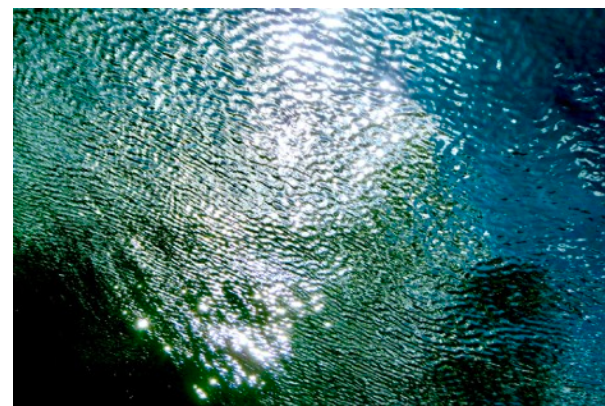
それを  
変わらない  
固く動かぬものとして  
ことばに  
閉じ込めてしまうとき  
ことばは  
すでに死んでいる

死んだことばと  
死んだことばで  
貧しい議論をしても  
疲れるばかり

論理と論理が争い  
勝った負けたと騒がしい  
勝つためのことばには  
だいじなことが忘れられているから

ことばになるまえ  
世界になるまえ  
わたしになるまえの

変化してやまない  
不思議な存在たちの遊ぶ  
沈黙の海を泳ぐことにする



\*愛媛県久万高原町笛ヶ滝公園にて



鏡は  
いたるところにある  
たとえば学校も鏡だ

そこで学ばなくても  
映しだされたものから  
学ぶことはできる  
そこに映っている  
じぶんを見つめることはできる

学校は  
矛盾を抱え  
光と闇の交錯する  
複雑な関数のようなものだから

x にじぶんを代入し  
そこに映しだされてくるものから  
学ぶことができる

まだ見ぬ答えは  
教える者ではなく  
問われた者にある

考えるのは  
教える者ではなく  
学ぶ者だからだ

答えが教えられたとしても  
なぜそうなのか  
わからないときはわからないまま  
答えをださないでいることだ  
そしてじぶんで考える

たとえ教える者が  
教えることで  
みずから学ぼうとさえしないとしても  
そこからさえ学ぶことはできる  
教える者もまた鏡となっているからだ

鏡になにを見るか  
そこからなにを学ぶか  
それが試される



\*愛媛県久万高原町笛ヶ滝公園にて



意識は  
時間のような

それと意識しないとき  
私は意識とともにあるが

意識とはなにか  
そう問いはじめると  
意識とはなにかが  
わからなくなる

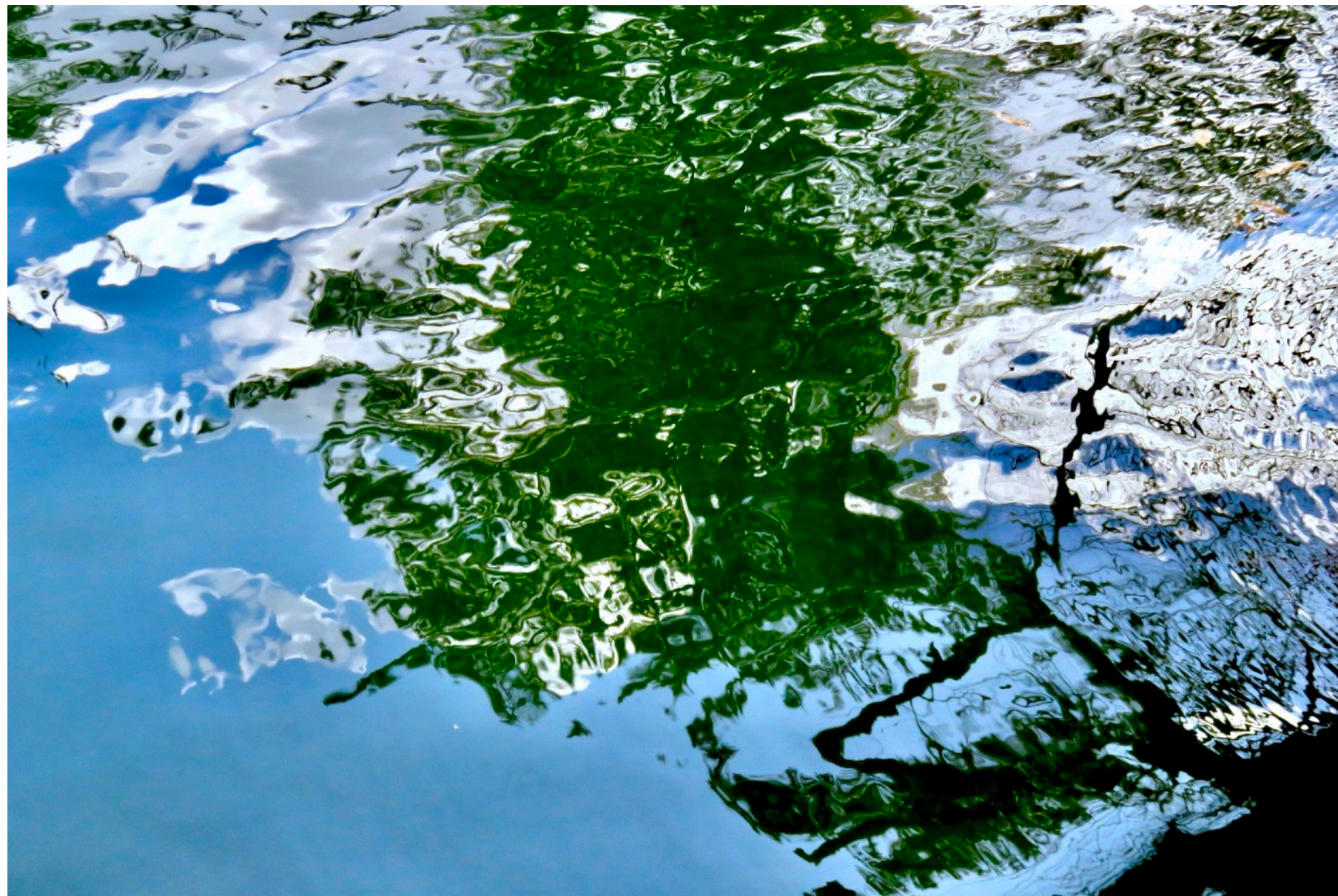
意識は私とともにありながら  
それがどこから訪れてくるのか  
知らないままている

意識は私から生まれているが  
それは私が私となるまえの  
深い源から  
訪れてくるのかもしれない

そしてわたしのなかで  
さまざまな姿をとりながら  
変化しつづけ  
私を超えてはるかに  
ひろがっていきもするだろうが

生きた時間は  
まさに今でしかないように  
私という意識は今を生きている

ときに夢み  
ときに夢さえもない深き眠りにあり  
そして目覚めれば  
世界とともにある  
そんな私という意識として



\*愛媛県久万高原町笛ヶ滝公園にて



右をつくと  
左ができる

上をつくと  
下ができる

ひとつが  
分けられて  
ふたつになる

分けられない渾沌が  
分けられてしまったとき  
死んでしまうように

ひとつが  
失われてしまうことでしか  
うまれないものがある

失われたものは  
どこに消えるのだろう

それとも  
ほんとうは失われずに  
別の姿をとっているのだろうか

白に決めれば  
黒ではなくなる

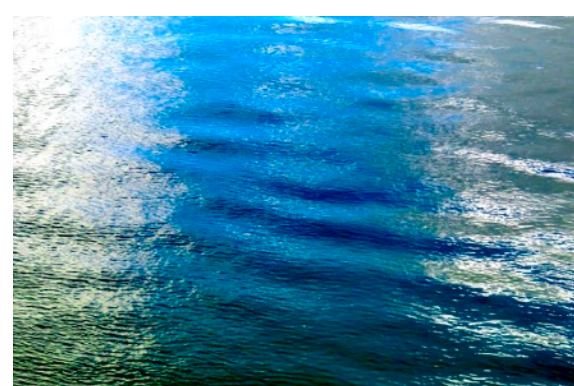
光で照らせば  
闇はなくなる

ひとつが  
選ばれて  
もうひとつがなくなる

あらわれるものがあり  
なくなるものがある

なくなるものは  
どこに消えるのだろう

それとも  
ほんとうは消えないで  
別の姿をとっているのだろうか



\*愛媛県久万高原町笛ヶ滝公園にて



組織に生きる者には  
その論理がある

組織が命じ  
組織人は従う  
ただそれだけのことだが

だれが命じるのかは  
問われない  
なにが命じられるのかも  
問われない  
あるのは上からの指示だ

命令は下される  
まるで神託のように

そして従うのは  
忠実な組織人

組織に生きる者は  
命令を疑うことが許されない  
たとえその命令が  
破壊的なものであったとしても  
従わないことは  
組織人を否定することだから

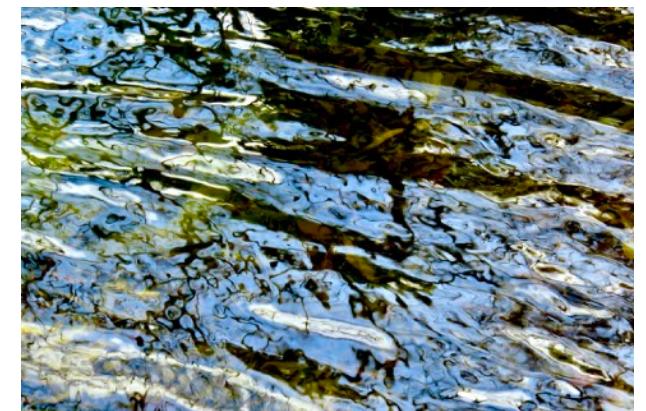
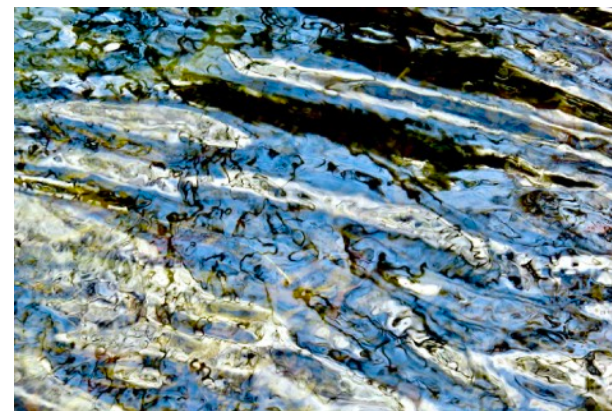
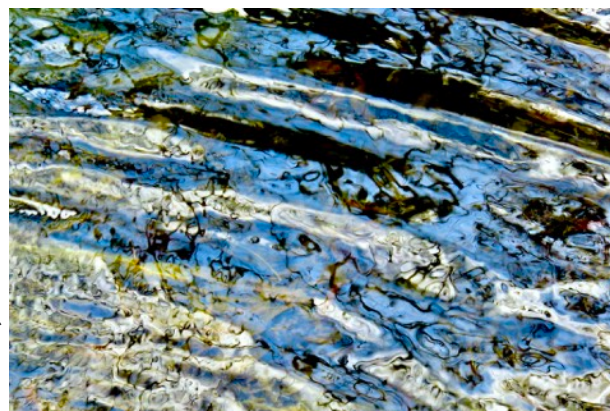
命令に従うことは  
やむにやまれぬ  
内からの衝動からではない

衝動は訪れる  
不意に  
否応なく  
ちっぽけな私の  
意思を超えて  
衝動はただ訪れるのだ

衝動はだれが与えるのか  
おそらくそれは  
だれでもない  
私を超えた私だ

私は私を超え  
深き真の自由を求め  
みずからに衝動を与える

そしてそれは  
組織の下す命令から逸脱し  
ときに組織を変える力ともなるが  
組織は自由な衝動を認める論理を持ちえず  
みずからを守ることに力を注ぐ



\*愛媛県久万高原町笛ヶ滝公園にて



記憶とは  
過去ではない  
いま生きている  
心の織物である

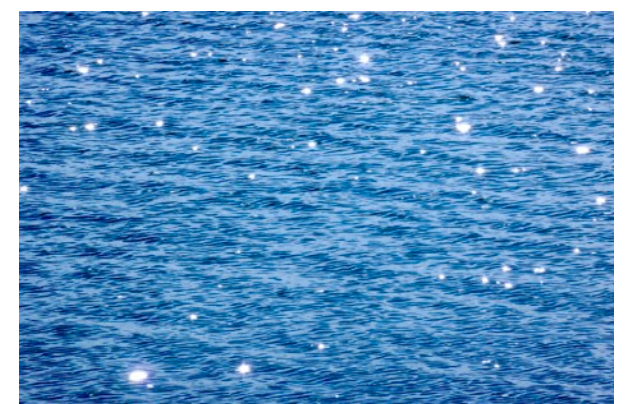
どんな感情も  
いまともにあることができなければ  
それは死んでいる

どんな思考も  
いまそれが生み出されていないとしたら  
それは死んでいる

記憶とは  
時間であり  
言葉であり  
歴史である

記されている歴史も  
いまそれを生きている感情  
いまそれが  
生み出されている思考が  
そこに織りなされていないとしたら  
それは死んでいる

私がいまなにを感じ  
何を考えているか  
それだけが  
私という存在を  
わたしが生きている世界を  
証しているのだから



\*愛媛県松山市・重信川河口にて



与えられた世界  
そこで生まれる想像力には外がない

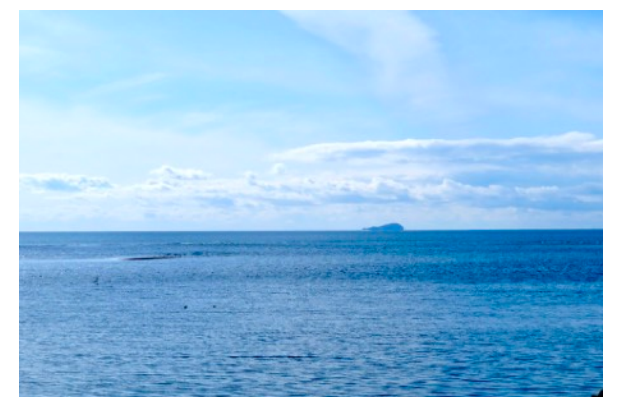
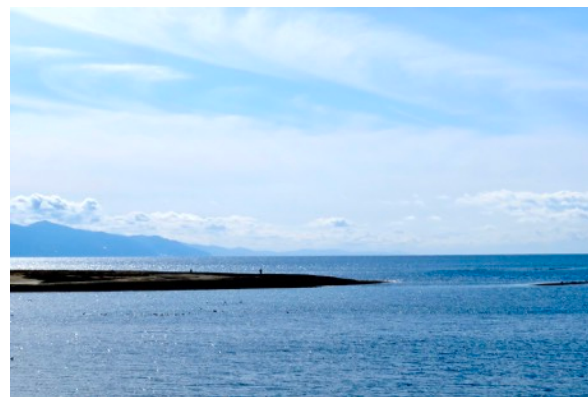
外を見るには  
想像力を越えた  
未知の想像力がある

未知は教わることができないが  
ときに詩の言葉は  
未知への見えない鍵  
その在処を指さしてくれることがある

月を指す指が  
月ではないように  
詩の言葉もまた  
鍵の在処ではないが

それはみずからが  
みずからを越えるとき  
はじめてその内に  
鍵を見出すことができる

その鍵が  
どんな扉を開けることになるのか  
はるかな冒険はそこからはじまる



\*愛媛県松山市・重信川河口にて



☆photopos-3443 2024.2.11

変わる  
変わる  
時代が変わる

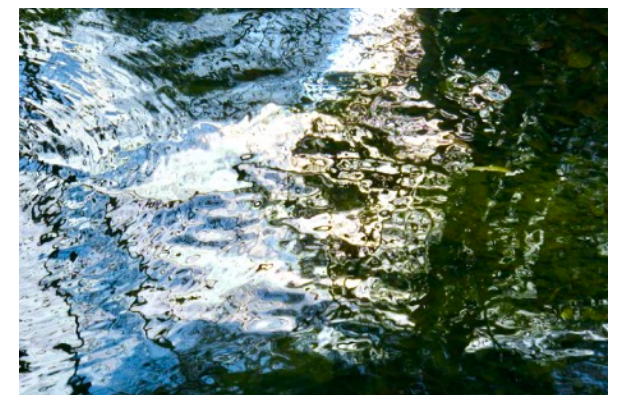
めまぐるしく  
破壊と再生が  
わたしたちを襲う

破壊の内に  
潰えるものもあるだろう  
再生によって  
作られるものもあるだろうが

再生に安住するとき  
そこには  
あらたな壁が生まれ  
その外を見る自由は  
失われていくだろう

わたしたちは  
みずからこそが  
変わらなければならない

みずからの作る壁を破壊し  
あらたな壁をつくることなく  
未知へと歩むことのできる自由へと



\*愛媛県久万高原町笛ヶ滝公園にて



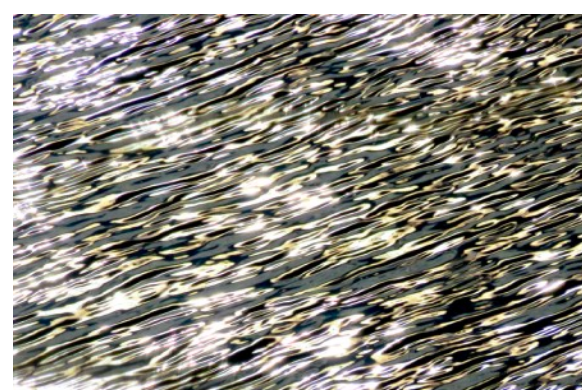
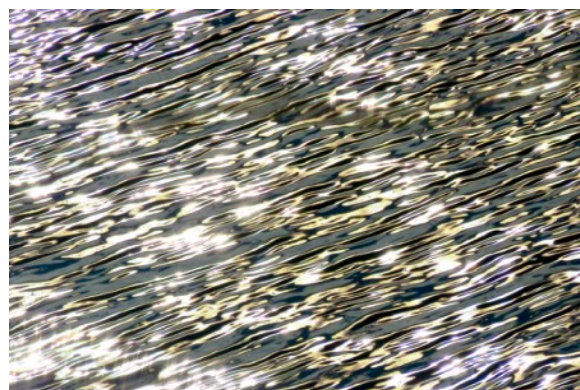
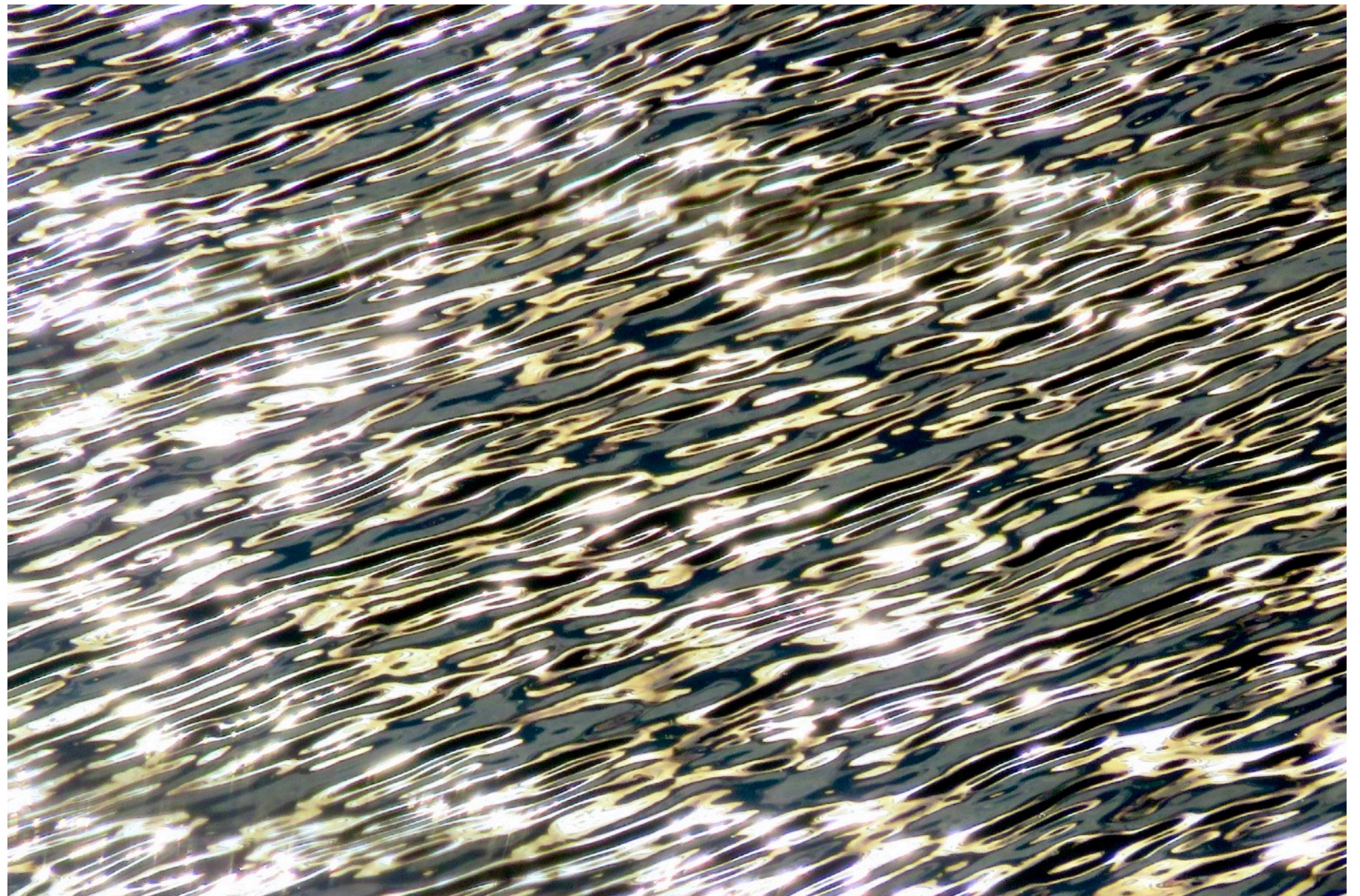
光には  
じぶんが  
見えないから  
闇を通して  
みずからを見ようとするように

私には  
じぶんが  
見えないから  
汝を通して  
みずからを見ようとするのか

闇のなかの光は  
苦しみのなかで  
さまざまな色を放つように

汝に映る私は  
鏡の捻れのなかで  
さまざまな感情を放つのか

そうして  
色は世界を染め  
感情は魂を彩る





美しいものを見るということ  
それは美しいものだけを見ることではない

分けられたものを超えながら  
見ることだ  
そこではじめて  
美は囲いから救済される

真なるものを見出すということ  
それは真なるものだけを見出すことではない

分けられたものを超えながら  
見出すことだ  
そこではじめて  
真はあまねく解放される

知識を得るということ  
それは知識だけを得ることではない

分けられたものを超えながら  
知ることだ  
そこではじめて  
知は智慧へと変容する

祈りを捧げるということ  
それは祈りだけを捧げることではない

分けられたものを超えながら  
祈り出すことだ  
そこではじめて  
祈りはたしかに届けられる





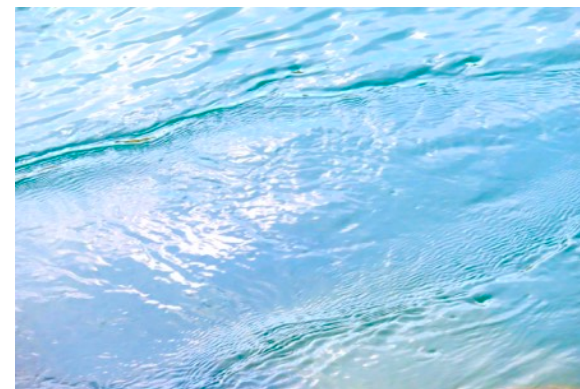
なにがわからないのか  
それがわからないでいるとき  
私はただ迷路にある

迷路にいることにさえ  
気づけないまま  
わからないでいることに  
とまどい続けている

わからないでいることに  
気づいたときはじめて  
迷路にあるじぶんに気づく

迷路を抜けるには  
どうすればいいのか  
右へ左へ  
上へ下へと  
さまよいながら  
出口への道を探しはじめる

迷路にありながらも  
やがて  
出口とはいったいなんなのか  
その問いへと到るとき  
はじめて  
なにがわからないのかに気づき…





☆photopos-3447 2024.2.15

知ることよ  
無垢であれ

知ことは  
いつもはじめて

愛することが  
いつもはじめての  
ときめきであるように

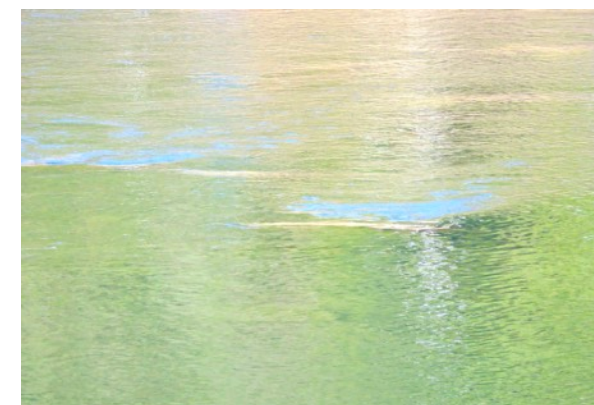
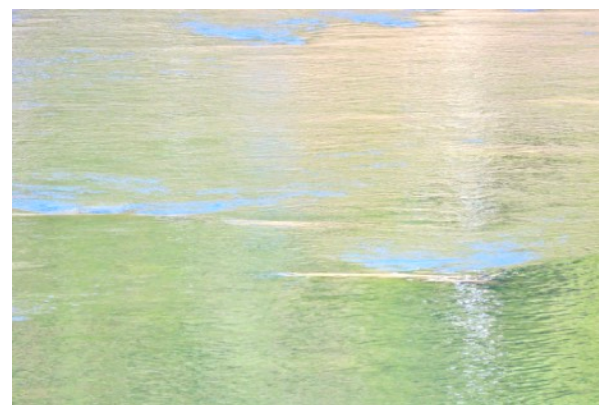
感じることは  
いつもはじめての  
驚きであるように

知ること  
ひらかれる  
自由なる無垢よ

光はいつも  
うまれたばかり

闇もまた  
うまれたばかり

わたしは  
光と闇を泳ぎながら  
いつも時のはじまりにいる



\*愛媛県大洲市肱川にて



情報は  
ウイルスのようだ

わたしたちは  
ウイルスとともに生きているが

その正体は  
生きているとも  
生きていないともいえず

増殖し感染し変異し  
生々流転する存在だ

そしてわたしたちは  
生かされもし  
病へと導かれもする

情報は  
食べもののようだ

わたしたちは  
情報を食べないでは生きられないが

なにを食べるか  
どのようにして食べるか  
それしだいで  
わたしたちの身心は変わっていく

ときに薬になり  
毒にさえなりながら



\*愛媛県大洲市肱川にて



水は  
存在しないが  
水は  
存在している

光に  
水はあられ  
魚に  
水はあられ  
私に  
水はあられるように

それぞれの水の  
あられのなかに  
映しだされる  
かたちがあり

奇跡のように  
それぞれは交差し  
戯れ遊びながら  
水はあられてくる

そんな奇跡が  
生きられている  
世界という秘密のなかで

私は  
存在しないが  
私は  
存在している！





心が  
いまを  
生きるとき

時は  
魔法のようだ

心には  
過去はなく  
いまだけがあるから

あのときの心は  
失われないうまま  
いまここにある

喜びは喜びのままに  
悲しみは悲しみのままに  
怒りは怒りのままに

時は  
ときに残酷だ  
忘れたくても  
忘れることができないから

時は  
ときに恵みになる  
何度でも  
甦らせることができるから

時は  
ときに祈りになる  
どんな過去も許し  
変わることができるから

過去から解き放たれ  
いまという  
心の魔法を  
自在に生きられますように



\*愛媛県久万高原町・笛ヶ滝公園にて